

救国訴え 湖北を奔走した 勤皇の志士

三上藤川

激動の幕末において攘夷派を貫き、

池田屋事件後に出奔、行方知れずとなつた三上藤川。その思想もさることながら、当時の湖北で、日本の行く末を案じた若者が何を思い、行動し、生きたのか。その生涯を、「三上藤川顕彰会」（長浜市大路町）が作成した資料と共に垣間見たい。

儒学・医学・兵法を極めた青春時代

藤川は、文政7年（1825）、美濃の国（岐阜県）関ヶ原の寺、浄土真宗大谷派園籠寺の子として生まれた。名は黙、僧名を東門、元服して忠藏と名乗り、号を藤川とした。青年期には、岩手旗本領（現在の岐阜県不

破郡垂井町岩手、関ヶ原町など5つのまち）の領主、竹中氏の菁莪塾で、儒学者であり医者、詩人でもある神田柳溪に就いて学ぶ。

そして、天保11年（1840）、藤川15、6歳のころ、若狭小浜藩士の梅田雲濱と出会い、尊王攘夷思想で意気投合。雲濱に連れられ、江戸幕府の学問所であった昌平塾（後の東京大学の前身のひとつ）に入塾し、安積良齊に師事、10年余りを江戸で過ごす。儒学、武技、兵法を研究し、国防について徹底的に学んだとされる。

嘉永6年（1853）のペリー来航のとき、藤川28歳。「東浅井郡志」には「藤川乃ち文會に託して諸友を集め、密に尊攘を議し、梁川星巖、梅田雲濱、小野湖山等と氣脈を通じ、時事を痛論し」とある。外圧に対抗し、攘夷運動を訴えるため、小野湖山など湖北の志士も巻き込んだとの記録が残されている。

藤川が長浜で暮らし始めるのは、安政4年（1857）からのこと。長浜市大路町の三上家の婿養子に入ったのだ。藤川32歳、妻の名は待尾。婿入り後は家業を継いで医者を生業としながら、私塾「桑陰村莊」を開いて子弟を育てた。

「安政の大獄」で攘夷派の志士が次々と捕えられたころ、藤川は結婚2年目の33歳。その後、一旦は落ち着いていた政治情勢は、安政7年（1860）に起きた「桜田門外の変」をきっかけに再び混乱。藤川の周囲でも、攘夷派の先鋒である長州藩の浪士が湖北に逗留し、彦



▲三上藤川肖像画

根藩に捕えられるなどの事件が起きている。攘夷思想を募らせる藤川が、ついに出走するのが元治元年（1864）、39歳のころ。藤川の生家、園籠寺に伝わる話によると、「長浜を出た藤川は関ヶ原に立ち寄って両親に別れを告げ、自分の刀を置いて長浜に残してきた妻子の庇護を願ひ、親から授かった両刀を差して出立した」という。

生涯を研究する「藤川顕彰会」

妻の待尾は、彦根藩の探索を待たずして家中の文書を全て焼くなどして藤川の動静に関わる証拠を消し去り、夫を援護した。また待尾はその後も大路に留まり、裁縫を教えて生計を立て、子の三重太郎を東京の医学校に入學させ、医者を継がせた。ちなみについて最近まで、代々「三上医院」として当地で開業していた。しかし、肝心の藤川のその後については全く分かっておらず、関ヶ原に立ち寄った後は、「長州へ行く」という言葉を残し出奔、生死も含めて不明のままとなっている。さて、これらの藤川の生涯を研究、伝承し

ているのが、地元大路町の「三上藤川顕彰会」（清水利展会長）である。昭和58年に、同集落の清水知徳さん、清水文佐久さんから先達の呼びかけで再建され、現在は他県の三上家の関係者を含め、大路町や近隣の有志30名ほどが参加している。活動は、顕彰碑が建つ集落内の郷社である湯次神社境内の碑域の清掃、命日としている9月17日前後に開かれる顕彰祭の催行、藤川の足跡などを辿る研修旅行、および会報、会誌の発行など。

顕彰碑は、大正7年に建立されたもので、除幕式には当時の県知事も参列したという。その後、地元有力者を中心に「藤川会」が結成され、太平洋戦争などを経て、戦後は藤川自身のことや顕彰碑の由来は忘れ去られていた。

「思想的なことをとやかく言うのではなく、地域の文化や歴史、先人の生きざまについて誇りと感謝の気持ちを抱かなければ地域はよくなる、と思いませんか、と清水会長。そこには、幕末の動乱の

こと、坂本龍馬、梅田雲濱など、そうそうたる歴史的人物が登場し、碑文が新鮮なものとなり、維新に関わる人物がこんなに身近にいたことに気づかされたという。

地域の誇りとして伝承

元高校教師で社会科を教えていた清水会長、郷土への愛着と使命感は人一倍ある、と自負しながら「勤皇の志として飛び回っていただけでなく、大路でどんな生活をしてきたのか知りたい。字が読めなかった人が多かった当時において、昌平齋を出て医者で書家であった藤川は地域の第一級の学者。憂国の志たぎるものがあり、熾烈な志士になったと思います。北国脇往還に近い大路の立地から、梁川星巖、橋本佐内、梅田雲濱、小野湖山、板倉槐堂（26頁参照）などの志士や、大岡松堂、大田翠巖、堤篁亭、大音菱陀などの地域の文士（33頁参照）とも交流があり、湖北では勤王精神が盛り上がりつつあったのではないかと思います。地元を知る上で今後も研究したいです」と話す。

また、「吉田松陰が来た」という伝承が三上家に残っており、「当時、松陰は全国の志士を訪ね歩いていたらしいので、大路の藤川を訪ねたことは、あながちウソではないのではと思う」と清水さん。地元の誇りとして、伝承していく事柄になるかもしれない。

さらに、清水さんと顕彰会が、これまで、またこれから最も関心を寄せていくであろう



▲湯次神社境内の「幕末志士 三上藤川先生之碑」

ことは藤川の最期についてだという。年1回の研修会では、碑文に載る人物を求めて各地を回り、少しの可能性にもかけて縁の人に会いに行ったりしている。

幕末の動乱期には、全国にたくさん志士がいた。明治維新として結実したのは、藤川の行方が分からなくなつてから4年後の慶応4年（1868）。そして、昨年は藤川出走後150年。当時、日本の政治や世界の動静の行方を思った若者が、何を考えながらどう行動したのか、故郷や妻子のことを思いながら死んでいった生きざまを振り返る、いいタイムリングかもしれない。

顕彰碑の周辺はきれいに整備され、脇往還には今日も多く車が行き交う。関ヶ原方面を望みながら、藤川出立の日を思った。（千）



▲碑前での顕彰祭（平成6年撮影）



▲「三上藤川顕彰会」の清水利展会長

見落とされた幕末「志士」

板倉筑前介(淡海槐堂)

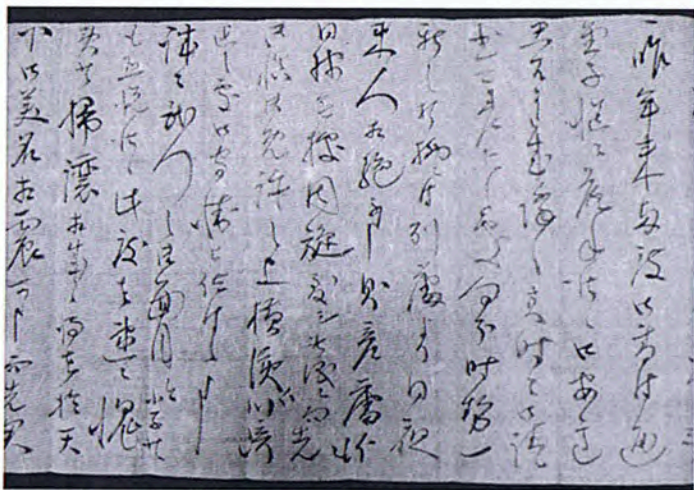


中村武生 (歴史地理史学者)

板倉筑前介(淡海槐堂、1822(1879)の名が一般に知られているとすれば、それは坂本龍馬殺害に関わるものだろう。慶応3年(1867)11月15日、京都河原町通蛸薬師の醤油商近江屋新助方で龍馬と中岡慎太郎が見廻組の襲撃を受けた際、現場にあった掛け軸などにその血が飛び散った。その「血染之軸」(梅椿図)の作者が板倉筑前介である。「槐堂」の落款が押され、「丁卯之晩秋」(慶応3年の9月)に描いたと記されている。

板倉は遭難当夜、近江屋を訪ねて龍馬にこれを贈ったとされる。龍馬らの遭難は、板倉の辞去のちである。もし辞去が遅れていたなら、板倉は龍馬らとともに凶刃に斃れていた(江馬務「江馬家と私を語る」)。

板倉は、中世以来の長浜南郊の名家、下坂氏の産である。幕末期の当主は下坂篁斎で、板倉はその五男である(六男が江馬天江)。家督は長兄が継ぐため、3歳のとき、板倉は



▲文久3年3月10日付下坂柳坪宛板倉筑前介書翰

(6行目から)
彦彦よりも 同様無
提周旋致シ候儀ニ而
先ノ御積御免許之上
横浜より川崎ノ迄之
契御守衛被仰付候事
誠ニ武門之御面目
と小子共ノも恐悦仕
候此度者迷ニ槐(醜)
ノ表共掃蕪(推)相
成候者於天ノ下御美
名相震可申而先君

て喜びにたえません」(意識)とある。この塾には「夫人」(女性)も2人おり、「朝夕文武之修行」をしていた。



▲「梅椿図」(京都国立博物館所蔵)

論の長州毛利家が失脚した同年の八月十八日政変では、板倉は、洛東大仏法院に立て籠もった親長州公家である三条実美らへ兵糧や酒などを提供した。三条らが周防三田尻などに移った同年11月に

京都東郊の伏見街道五条下ル(本町一丁目)の薬商武田以成のもとに移り、のちその娘の夫として同家を継いだ。同店は「おけやくすり・保命丸」を主要商品とし、明治前期ではあるが、京都の薬商の番付表において小結に位置付けられ(京都売薬盛鑑)1876年)、1883年刊行の商工便覧「都の魁」にも取り上げられた著名店である。

その後の経緯は不明だが、薬商を維持しつつ、公家(清華家)の醍醐家に所属し、従六位下板倉筑前介を名乗るのである。

板倉は「詩文書画」に秀でた経済力のある地下官人という背景により、一定の存在感を示していたと思われる。文久2年(1862)11月頃、実弟江馬俊吉(天江)らとともに、洛東大仏境内の智積院に土佐山内家の陣屋を誘致することに成功している。

これ以後、板倉は山内家臣や浪士との交流を深めてゆく。坂本龍馬は少なくとも元治元年(1864)6月以前、同郷の北添佑摩ら出身地を異にする者が多く在塾するという環境が、土佐をはじめ河内、三河、常陸、因幡、筑前、筑後、肥前、肥後出身者によって構成される天誅組発足メンバーの集合地として好都合だったのではなからうか。京都守護職や所司代などから嫌疑を受けにくいと判断された可能性を指摘しておきたい。

この時期、板倉に接近する者が増大した。そのなかには彦根井伊家もあった。湖北出身者として、桜田門外の変以後の井伊家の低落は見逃ごせなかつたらしい。詳細は不明ながら多くの尽力をした。だから当主直憲の謹慎解除、および相模横浜の守衛を徳川公儀から任じられたことに欣喜し、もし井伊家が横浜で異国船を撃退(攘夷)し国防を実現できたなら、全国に「御美名」がとどろく。「先君」(直弼)の汚名が「一洗」されるのはまさにいまだと期待していた(文久3年3月10日付長兄下坂柳坪宛板倉書翰、上記右の写真)。

と大仏南門前に住んでいた。板倉との交流はこのころに遡る可能性がある。

板倉は山内家臣平井収二郎らの同意を得て、大仏境内の「日吉山」(現京都市東山区今熊野日吉町付近)に文武道場「並修館」を設置した。文久3年(1863)8月、大和で挙兵する天誅組は、離京に先立ち「方広寺道場」に集合した。これが「並修館」と思われる。天誅組は土佐浪士吉村虎太郎らによって組織されたため、山内家所縁の地が選ばれたと筆者は過去に指摘した。

その後、新たな史料を得た。文久3年と推定される6月下旬から8月までに記された下坂篁斎宛板倉書翰(下坂家文書、長浜城歴史博物館蔵。以下板倉書翰は同一)によれば、「塾中も多人数になり、来たる九月には長崎の者が三、四人、出羽人(現山形県)、蝦夷松前(現北海道)など遠国の者までが(入塾予定で)、きわめて熱心に学習しようとしてい

は、金1500両の貸与支援をしている。翌月、それらの謝礼として、長州毛利家は「御扶持方三分分」を「御一生差送」ることを約束している。

元治元年6月の池田屋事件では、受難した土佐家臣藤崎八郎と野老山吾吉(吾吉郎)が個別に板倉邸に逃れている。たとえば野老山については、その身なりを改めさせ、脇差や金300疋を与え、長州屋敷の蘭医所郁太郎へ頼ることを指示した。このような板倉の活動は、守護職らの気づくところとなり、翌月の甲子戦争(禁門の変)のあと、板倉は逮捕され投獄される。

33ヶ月の在獄をへて、慶応3年4月7日出獄した。同年7月、土佐海援隊メンバーの高松太郎(坂本龍馬の甥)・安岡金馬へ1千両、同年10月には中岡慎太郎に300両を貸与したことが分かっている(未返済)。翌月には龍馬へ「梅椿図」を贈与しており、彼らとの交流は出獄後も断たれなかった。

維新後は政府に仕官するものの、まもなく退官し「帰農」する。薩長勢力によつてのみ維新がなされたわけではないと考える立場にたつとき、板倉の存在は誠に興味深い。今後の探究が期待される。

- 参考文献
- 「龍馬殉難ひろい話」(西尾秋風 私家版)
 - 「池田屋事件の研究」(中村武生 講談社)
 - 「幕末期政治の主要人物の京都居所考」(中村武生 御厨貴・井上章一編「建築と権力のダイナミズム」所収 岩波書店)



板倉筑前介像(雲山歴史館所蔵)